

薔薇と貧困—メルヴィルの「ジミー・ローズ」論

Rose and Poverty—Melville's "Jimmy Rose"

松 阪 仁 伺*

MATSUSAKA Hitoshi

ハーマン・メルヴィルの短編「ジミー・ローズ」の批評史において、十分に理解されていないのは、象徴としての薔薇の重要性である。薔薇は伝統的に、エロスとアガペー、「性愛」と「聖愛」のシンボルであった。特に注目すべきは、メルヴィルにおいては、それがイエス・キリストを暗示しうることである。その典型的な例は、処刑されたビリー・バッドが昇天する際に、空が「薔薇色」に染められていることである。ビリーは明らかに救世主を下敷にした人物である。

この作品を解説するもう一つのキーワードは「貧困」である。アメリカ人の信奉するエートスは、アメリカンドリームである。彼らにとっては、富貴こそが人生の目標である。しかし、メルヴィルはそういう価値観を逆転させて、むしろ貧困にこそ人間の尊厳が存すると主張する。

メルヴィルの貧困観の根底にあるのは、福音書であろう。キリスト教は貧者の宗教であって、「幸いなるかな貧しき者」と述べて常識を覆したのがイエス・キリストである。

聖書の貧困観を文学作品に結晶させたのが、ホーソーンの『ブライズデイル・ロマンス』の作中話たる、ムーディ老人の転落の人生である。前半生においては、彼は思うままに富貴を楽しんだが、同時に軽薄で高慢でもあった。転落の後に、彼は深みのある優れた人物に変貌する。

彼の人生の二つの局面は、二人の娘によって具現されている。前半生の結果たるゼノビアは高慢な奔放な愛に生きる女性であり、対して後半生の結果たるプリシラは真実の愛に生きる女性として描かれている。そして、二人の女性がともに薔薇のイメージで彩られていることは注目すべきである。

メルヴィルは、聖書とホーソーンの貧困観を土台にして、それを新しい方向に展開している。

キーワード：メルヴィル、薔薇、孔雀、貧困、キリスト

Key words : Melville, rose, peacock, poverty, Christ

この作品は、メルヴィル (Herman Melville) の短編群の中の際だった高峰ではない。それほど長い作品でもなく、作者が心血をそそいだ作品とは言い難い。その小品に、筆者が興味をもったきっかけは、題名であった。これは「ローズ」つまり「薔薇」(rose) という名前を持った人物の物語なのだ。メルヴィルが薔薇に深い象徴性をこめていることが、予感されたのである。一読してみても、その期待は裏切られることはなかった。シンボルとしての薔薇の理解なしに、この作品を正当に評価することはできない。そして、過去の研究において、その点が十分に理解されていない。

アメリカ文学の傑出した作家たちは、薔薇に深い意味をこめている。『緋文字』(The Scarlet Letter) の冒頭の監獄の前に咲く薔薇が想起されるし、『怒りの葡萄』(The Grapes of Wrath) は「シャロンの薔薇」(Rose of Sharon) という女性の印象的な描写で終わる。あるいはフォークナー (William Faulker) の傑作短編の題名は「エミリーに薔薇を」("A Rose for Emily") である。そしてメルヴィルも薔薇に深く魅せられた文豪であった。

薔薇の象徴性の理解なしに、メルヴィル文学の解説は不可能である。¹

薔薇は愛の花であり、愛がこの作品のテーマである。

さらに本論が強調したいのは、この物語の主題が「貧困」あるいは「貧困の礼賛」であることだ。メルヴィルにおいて、貧困をテーマとした作品はかなりの数にのぼる。そこに一貫して見られるのは、作者の貧者に対する暖かい視線である。

この点に関するメルヴィルの思想の原点は、聖書とくに福音書のはずである。われわれは、イエスが富貴を賞賛し、貧困を貶めたのではないことを思い起こす必要がある。イエス自身が貧しい家庭に生まれたのであり、かれに従った使徒たちも貧しい漁労民たちであった。キリスト教は貧者の宗教である。

ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) の『ブライズデイル・ロマンス』(The Blithedale Romance) の作中話として、ムーディ (Moody) 老人の転落の人生が語られる。その人生の軌跡は、正にジミー・ローズの運命そのものである。老人の人生の二つの局面は、それぞれの時期に

*兵庫教育大学大学院教育内容・方法開発専攻文化表現系教育コース

平成24年11月8日受理

生まれた娘にシンボリックに表現されている。富貴の申し子であるゼノビア (Zenobia) は、高慢そのものの女性である。ゼノビアという名前そのものが古代の女王の名前である。

それに対して貧困の極みにおいて生を受けたプリシラ (Priscilla) は真実の愛を生きる女性として描かれている。しかも注目すべきは、この腹ちがいの姉妹には、薔薇のイメージが重ねられることである。

ホーソーンは福音書におけるイエスの真意を見抜いて、それを作品に結実させたのである。「ジミー・ローズ」の前テキストはホーソーンの『プライズデイル・ロマンス』である。

しかしメルヴィルの貧困観は、ただ書物による知識のみによって形成されたのではない。それは実体験に根ざしている。彼は貧困を生きた作家であった。

ニューヨークの輸入商の三男として生まれたメルヴィルは、裕福な幼少期を過ごした。しかし、父は事業に失敗してその後、狂死する。ために、十三歳の時に生活のために学校をやめて、働き始めなければならなかった。貧困はメルヴィルと一家にとっては、決して絵空事ではなかった。メルヴィルの父や伯父、あるいはハーマン自身が、主人公のモデルの候補となっている。² 実際の体験が、メルヴィルの貧困の哲学を深化させている。

福音書とホーソーンが教える貧困観は、アメリカンドリームを逆転させている。一般の常識とは異なり、貧困が富貴の優位にあるのである。メルヴィルは、そういう思想を継承し発展させている。メルヴィルにとって、アメリカの貧者は、憐憫の対象ではなく、むしろ高貴なる存在である。

物語の語り手は、ウィリアム・フォード (William Ford) であり、主人公のジミー・ローズの親友である。老境にさしかかった語り手は、田舎から都会に移り住んで、かつての友人の邸宅に住み着く、という設定で物語は始まる。家は、語り手を懐旧の情に誘い、そこからかつての友人に対する想いを語るという設定になっている。

都会とはニューヨークであり、そこで若き時代をすごした語り手は、現在の風景に過去の情景を重ね合わせる。かつては上流階級の邸宅が建ち並んだ一帯は、現代では会計事務所や倉庫が目立つ商業地域に姿を変えていて、住んでいるのは往事とは異なり、下層階級の人びとである。注意すべきは、語り手が保守主義者であり、過去の栄光に想いを寄せて、現在の商業主義に反発を覚えていることである。この懐古趣味が物語全体を支配するトーンである。

語り手が譲り受けた邸宅も、栄華の面影を残している。

家の外装は、新旧の入り交じった、まだら模様のような様相を呈している。例えば、「元の重々しい錠戸」

(“the original heavy window-shutters”) (337) は「安っぽいベネチアン・ブラインド」(“frippery Venetian blinds”) (337) に取り替えられていた。語り手が洩らす口吻には、新を軽んじて旧を重んじる姿勢がさり気なく表明されている。

新旧のまだら模様のような外装とは異なり、家の内部は九十年前と全く変わっていない。そこで強調されるのは貴族趣味であり、外国趣味である。居間を飾る豪華な壁紙はヴェルサイユの紙であり、マリー・アントワネットの私室にふさわしいものである。壁紙に描かれているのは、鳥とくに孔雀であり薔薇である。これらはいずれもシンボリックな意味をになっている。この部分の描写には注意を払う必要がある。

いくつかの菱形の紋には、^{おうむ} 鸚鵡、^{いんこ} 鸚哥、^{くじゃく} 孔雀が描かれている。注目すべきは、その紋が「庭園の鳥籠」(“garden-cage”) (337) に譬えられていることであり、その鳥籠の真ん中を「薔薇の花綱」(“festoons of roses”) (337) が通っていることである。非常に微妙な描写であるが、鳥籠は孤独の象徴であろうし、薔薇の花綱は孤独をつなぐ絆、つまり愛を意味していると解釈すべきであろう。これはこの作品のテーマたる、人間と人間の関係を象徴的に表現している。「ジミー・ローズ」は人間関係の悲劇である。

孔雀は聖書や英文学、とくにシェイクスピアなどに頻繁に登場するシンボルである。この華麗な姿をした鳥は、「虚栄」と「高慢」のシンボルである。「孔雀のごとくに高慢な」(as proud as peacock) は広く人口に膾炙した言い回しである。おのれを高くして、他人を貶める高慢が、人間関係を損ない、愛の精神に背くことは自明である。そして富貴なる人が高慢であることは聖書の教えるところである。

薔薇は西洋においては花の女王であり、極めて多義的で、豊かな象徴性をほこるシンボルである。メルヴィルが薔薇の象徴性に無関心でなかったことは、例えば「薔薇の元で」(“Under the Rose”) という詩のタイトルからも窺うことができる。薔薇の象徴性の一つは秘密であり、「薔薇の元で」は秘密を意味する。

薔薇の象徴性の基本は、それが「愛」の花であることである。薔薇はエロスのそしてアガペーの象徴であった。赤い薔薇は愛の女神ヴィーナスの花であった。男女の愛、つまりエロスの象徴であった。さらに白い薔薇は聖母マリアの花であり、神の愛、つまりアガペーを象徴する花であった。つまりは薔薇はエロスとアガペー、「性愛」と「聖愛」の共通のシンボルであった。伝統的には役割分担があって、清楚な白い薔薇は聖愛の、赤い薔薇は性愛の象徴であった。しかし、薔薇といえはなによりも赤を連想させるところから、赤い薔薇が二つの愛の共通のシンボルでもあった。

薔薇は基本的に女性のシンボルである。しかし、メルヴィルにおいては、それは男性、しかもイエス・キリストの象徴でもあることには注意しなければならない。ビリー・バッド (Billy Budd) が処刑され、昇天する時に空は薔薇色に染められていることが想起される。ビリー像の下敷になっているのは無論、救世主である。あるいは「薔薇窓」(“The Rose Window”) という短詩には、「シャロンの薔薇、復活であり生命であるキリストの象徴」(“The Rose of Sharon, figuring Him The Resurrection and the Life”) という印象的な語句が見られる。「シャロンの薔薇」は旧約のソロモンの雅歌中の語句である。³

得意の絶頂の時にも、失意のどん底の時にも、鮮やかな薔薇色を失わなかったジミー・ローズの頬の薔薇色には、宗教的な意味がこめられている。

物語は、薔薇と孔雀を中心シンボルとして展開する。ジミー・ローズの前半生はまさに得意の絶頂の時代であった。生まれつきの大金持ちではなかったが、商売の才能に恵まれた彼は財産を増やして、派手なパーティを催す金持ちになった。陽気で才気あふれた彼は、おおくの人びとを招き、盛大に饗応したのである。女性との交際を大切にすれば、婚姻によって、女性賛美者としての自らの自由を制限することはなかった。結婚という制度にとらわれることなく、奔放な恋愛を楽しんだと解釈できる。メルヴィルは薔薇がエロスの象徴であることを意識している。さらに高価なワインをおしげなく客人たちに提供した。

無軌道な恋愛とワイン、そして客人を喜ばせるための途方もない大盤振る舞い。これらから浮かび上がってくるのはジミーのパーティの祝祭性である。パーティーとは一種のカーニバルであろうが、メルヴィルが特にそのカーニバル性を強調していることには注意しなければならない。彼のパーティは祝祭、カーニバルそのものである。ホーソーンの「メリイマウントの五月柱」(“The May-Pole of Merry Mount”) においては、華麗な祝祭の世界が描かれる。そのカーニバルの中心にあるのは、五月柱に架けられた、赤い薔薇の花であった。薔薇は愛の花であり、そして祝祭の花でもある。メルヴィルが尊敬する先輩作家の傑作短編を知らないはずはなからう。ジミー・ローズ自身がカーニバルの精神そのものであろう。

しかしカーニバルのバブルは突然に破裂してしまう。奔放な浪費に加えて、商売で致命的な失敗をしたためであった。破産の原因について、語り手は具体的には語らない。しかし、「だが時代が変わった。時こそ、四季の真の剽窃者なのかもしれない。」(But times changed. Time, the true plagiarist of the seasons.) (339) という語り手の述懐は、破産の原因が単にジミー個人に帰せら

れない可能性を示唆している。鷹揚で貴族趣味的な商売の時代は過去のものとなってしまったのである。それはカーニバルの世界から現実世界への帰還でもあった。それはアメリカの厳しいビジネスの世界の到来であった。あるいはもう一步進めれば、それは楽園の喪失でもあった。われわれは、楽園の喪失とともに<時>の支配が始まったという神話を想起しておく必要がある。破産の後に、語り手はジミーをあしざまに罵る男に出会う。彼は、間接的にはあるが、七十五ドル七十五セントの損失を蒙ったのであった。細かい数字そのものが、この人物の妥協をはいた金銭感覚、ビジネス感覚を物語っている。

ジミーの盛大なパーティーで、高価なワインをがぶ飲みしたのはこの男である。彼は、ホストに隠れて高級ワインをグラスに注ぎ続けたのである。ワイン代だけでも、かれの損失を償ってあまりある、というのが語り手の判断である。

これがメルヴィルが生きた時代のアメリカ人の典型なのである。

語り手は、破産したジミー・ローズを訪ねるが、すっかり人間不信におちいったジミーに銃で脅されて退散してしまう。

破産とともに、親友たちは鬼のごとき債権者に姿を変えた。ジミーと彼らの心の絆は偽りのものであった。彼らには、実利と金銭が友情に優先したのである。それゆえにこの作品は、当時のアメリカ社会に対する痛烈な批判である。得意の絶頂にあったジミーのまわりには雲霞のごとくに人びとが集まったが、零落とともに友人たちは敵に変貌してしまった。

しかしすべての友人が変節漢ではなかった。変わらず親友であり続けた人々もいたのである。その代表格が語り手その人であろう。ジミーの葬式に参列したのは、語り手をふくめて、ただの三人だけであった。しかも皆よぼよぼの老人であった。これらの人々だけが、富める時も貧しい時も、変わらず友人であり続けたのである。「金の切れ目が縁の切れ目」という格言を想起する読者もいよう。あるいは、『偉大なるギャッツビー』(The Great Gatsby) の結末を彷彿させるともいえる。彼の途方もなく豪華なパーティーには、雲霞のごとくに人びとが参集した。招待されない客も多数いた。

殺害されたギャッツビーの葬列に参加したのは、数人の召使いと郵便局員を除いては、語り手のニック (Nick Carraway) とギャッツビーの父とフクロウの眼鏡をした男のみであった。人々は金の力に目が眩んだだけであったのだ。

ギャッツビーが築いた友人関係のはかなさを端的に語るエピソードである。ジミーがたどったのも同じ運命であった。

しかし両作品の語り手は、ともに主人公の真の価値を

認めながゆえに、変わらぬ友情を保ち続けた。男性の代表が語り手であれば、女性の代表はある市会議員の娘であって、彼女は貧困の中で病をえた主人公の末期を看取った。何等の利害や打算に基づかない、愛の行為である。しかし真実の隣人愛の実践者は例外中の例外であった。債権者に追い回されるジミーを訪れた語り手は、銃によって追い払われてしまう。語り手が彼に再会したのは、それから二十五年後のことであった。

得意の絶頂から零落の運命をたどった主人公はいかなる変貌をとげたのか。主人公の生き方を是とするか非とするか、彼は賞賛に値するのか非難されてしかるべきなのか。研究者の意見は多様である。彼は毀誉褒貶相半ばする人物である。

この作品の批評史において分水嶺をなすのはガルガーノの論文であろう。それ以前においては、例えばチェイスやフォーゲルは、零落と苦難の体験は主人公を精神的に成長させたと評価している、つまり主人公を賞賛する立場をとったのである。⁴

それに対してガルガーノは、主人公の欠点を指摘し、その人格に変化は認められない、と考える。つまり、失敗の体験は、精神的成長を促さなかったのである。ガルガーノによれば、ジミーの人生は「意味のない笑いを浮かべ、気取ったポーズ」(“meaningless simpers and affected poses”)をとるだけの人生であった。⁵

さらには、主人公に対して、同情の視線を送る研究者もいる。ジミーは、北部に勃興しつつあった、産業資本主義に適応できない南部の紳士だという意見である。ジミーの悲劇は基本的に時代に変化によってもたらされたと解釈する立場である。⁶

ガルガーノによれば、薔薇と孔雀が象徴するのは、「派手な上品きどりと高慢」(“showy gentility and pride”)である。⁷

このガルガーノの論は全く支持できない。その理由を明らかにしてみたい。この論文の欠点はそのまますアメリカにおける文学研究の欠陥をあぶり出している。最初に指摘しておきたいのは、アメリカ人の「独創性」に対する盲目的な信仰である。つまり、論文はオリジナルでなければ意味がないという考え方である。これは妥当な見解ではある。従前と変わらぬ論であれば、わざわざと執筆し発表する必要がないからである。しかし、彼らの場合にはそれが度を越えているように感じられる。つまり、独自性を強調するあまりに「新奇な」な説、執筆した本人も信じているのかと疑われる新説珍説がはびこる傾向があるように思われる。この論文にもそういう趣きが皆無とは言い切れない。

さらに問題であるのは、テキストの重層性に対する無理解である。優れた文学作品のテキストは、単層ではな

く重層構造をしている。ホーソーンやメルヴィルの場合は、それはヨーロッパ古典文学でありイギリス文学であり、その基底にある神話であり聖書である。

無論、メルヴィル研究においてそういう視点が欠けているわけではない。『白鯨』(Moby-Dick)などの、作者自身が意図的に聖書に言及する場合には、当然のことながらヨブ記やヨナ書などの影響が論じられている。しかし、本作品のように、メルヴィルがあえて言及しない場合には、その影響が無視される傾向がある。

具体的に言えば、ガルガーノの象徴に対する無理解である。孔雀に関しては、それが「上品きどりと高慢」の象徴という指摘は納得できるが、薔薇の象徴性については全く無知である。

さらには、この作品の根底には聖書があることを見逃している。それは、聖書とくに福音書におけるイエスの貧困に対する見解である。イエスは金持ちを称揚して、貧困を呪ったわけではない。金持ちが天国に入るのは、駱駝が針の穴を通るよりも困難であると指摘したのはイエスであった (Matt 19:24)。イエス・キリスト自身、決して豊かな家庭に育ったのではないし、弟子たちも貧しい漁師たちであった。そしてメルヴィルはイエスのメッセージを真摯に受け止めているように思われる。

福音書において、「幸いなるかな貧しき者」(Luke 6:20)と貧者を持ち上げたのはイエスなのである。同じルカ伝では、直後に富者に呪いの言葉が投げかけられている。これは現世における、不公正と不平等に対して向けられて怒りであろう。イエスが語るのは、この世における不公正は、来るべき天の王国において逆転することである。

しかしイエスの真意はそれだけに留まらないはずである。困窮はそれ自体において賞賛されるべきことなのである。マタイ伝において、イエスは「幸いなるかな心貧しき者」(Blessed are the poor in spirit) (Matt 5:3)と語っている。これはルカ伝に類似した表現である。これらは同じ伝承に基づくが、ルカ伝の方が、より古い形態を伝えていると理解されている。「心貧しき者」(the poor in spirit)とは理解困難な言い回しであるが、傲り高ぶらない謙虚なる人間と理解されている。ここに想定されているのは、富める者は傲慢になりがちであり、貧しき者は謙譲の美德を備えていることである。

この福音書のメッセージを真摯に受け止めたのが、先輩作家たるホーソーンであった。

ホーソーンは『ブライズデイル・ロマンス』の第22章において、ゼノビアとプリシラの共通の父親であるムーディ老人の人生を語っている。二人の姉妹に強い関心を持つカバデイル (Coverdale) が陋巷で酒杯を傾けながら、老人の告白を聞くという設定になっている。彼の前半生はまさに外面の華美のみを求める、軽薄な人生であっ

た。彼は「富と華麗な趣味を持った、途方もない浪費家」(“a man of wealth, and magnificent tastes, and prodigal expenditure”)であった。⁸ 彼は美貌の女性と結婚したが、それは彼の人生の華麗さを飾る装飾にすぎなかった。真実の愛に基づく結婚ではなかった。

しかし運命の変転により、彼は貧困のどん底にたたき落とされてしまう。北部のニューイングランドに逃れて、名前を変えて、新しい人生を始める。「彼の人格は根本的な変革を遂げた」(“His character appeared to have been radically changed”)のである。⁹ プライドは踏みつけにされ、表面の華美を求める浅薄さは消滅してしまう。貧しさの中で、イエスが祝福した「心貧しい者」つまり、高慢を捨てた謙虚な人間に変貌したのである。

困窮の最中に彼は貧しい「お針子」(seamstress)の女性と再婚する。作者は敢えて言及を避けているが、これは真実の愛に基づく結婚であろう。その女性は「柔和な」(“meek-spirited”)や「優しい」(“gentle”)と形容されている。¹⁰ これらはキリストを連想させる言葉と判断してよからう。

彼の人世の二つの局面は、その時期に生まれた娘によって具現されている。前半生の結果たるゼノビアは何よりも高慢な女性であった。それは、彼女の名前そのものに示唆されている。ゼノビアは古代のパルミアの女王の名前であった。

対して後半生の結果たるプリシラは、母親と同じ貧しいお針子であった。そしてやはり、母親に似て、真実の愛にあふれた女性であった。

そしてこれらの姉妹が、薔薇のイメージに彩られていることは注目すべきである。「ゼノビアは結婚している。ゼノビアは生きて恋をしたのだ。この満開の薔薇には、開花していない花卉や、隠れた露などはないのだ」(Zenobia is a wife; Zenobia has lived and loved! There is no folded petal, no latent dewdrop, in this perfectly developed rose!)というのが、彼女に性的な魅力を感じているカバデイルの言葉である。¹¹

少女のプリシラは「薔薇のつぼみ」に喩えられている。町での悲惨な生活の後に、プライズデイルで幸福な生活を送り始める。その時に、プリシラは「彼女は喜びに満ちて、頬に薔薇の花を咲かせていた」(“She was joyous now, and had a rose-bloom in her cheeks”)と描写されている。¹² プライズデイルは理想共同社会を建設する実験であった。頬の薔薇はまさに、ジミー・ローズを彷彿させる。

この点が理解できれば、「ジミー・ローズ」において重要なシンボルたる孔雀と薔薇が何を象徴しているのか、明らかにはなはずである。孔雀は前半生の虚栄とプライドの象徴であり、それは後半生においては無惨に踏みつけられたのである。薔薇は前半生における女性に対する愛を、

そして惜しみなく人々にあたえるカーニバルのごとき愛のシンボルであり、それは後半生において、精神的な宗教的な愛に変貌した。

以上の点を作品に即して検討し、確認してみたい。そしてメルヴィルのこの作品は、ホーソーン作品を継承しながら、新たな方向に進展させていることが、明らかになるはずである。

二十五年の隠遁ののちにジミー・ローズは再び世間に交わり始める。

皺だらけで死人のごとくに青ざめた顔を想像していた語り手を驚かせたのは、かれの頬に咲いていた「古のペルシャの薔薇」(“the old Persian roses”) (342)であった。ジミーの薔薇は不滅である。その次第は次のように語られる。

災難が降りかかって、債権者たるかつての親友たちが、監獄送りにするために彼を腐肉のごとくに追い回した。彼は追跡と、人目を避けるために、古い見捨てられた家に隠れ住んだ。そしてそこで孤独のために、半ば錯乱状態にあった。しかし、歳月の流れとともに、正気を取り戻したのである。多分、ジミーはあまりに善良でかつ優しくかったので、いかなる理由によっても人間嫌いにはならなかった。疑いもなくジミーにとっては人間との交わりを避けることは宗教に反する行為に思えたのである。

Though at the first onset of his calamity, when creditors, once fast friends, pursued him as carrion for jails; though then, to avoid their hunt, as well as the human eye, he had gone and denned in the old abandoned house; and there, in his loneliness, had been driven half mad, yet time and tide had soothed him down to sanity. Perhaps at bottom Jimmy was too thoroughly good and kind to be made from any cause a man-hater. And doubtless it at last seemed irreligious to Jimmy even to shun mankind. (342)

ムーディ老人はプライドを踏みにじられたのちに、人目を避け隠遁の生活を送るようになる。同様に、ジミーは債権者を避けるために、古い家に隠れ住んで、孤独のあまりに気違いになりかかっていた。

ムーディ老人とは異なり、ジミーは再び、自らを世間の目にさらす決心をする。それは露命をつなぐための物乞いをするためであった。語り手が涙ながらに語るのは、ジミーがかつての友人たちの家を訪問しながら、さり気なく食べ物を口に運ぶ姿であった。餓えを満たすために食べていることを、悟られない努力をしながらの行為であった。

しかし引用の後半部分に注目してみよう。つまりジミー

は善良で優しくかったので、いかなる仕打ちを受けても人間嫌いにはならなかったことである。かれの心中においては、愛の炎は消えていなかった。

ジミーが世間に接触しはじめたのは、空腹を満たすためだけではなかった。それは、同時に宗教的行為でもあった。

かつて富貴の絶頂にあったときには、かれが施しをする立場にあった。その立場を逆転させることは、かつての貧者の立場を体験するためでは、なかろうか。実際に、人に憐れみと施しを求める行為ほどに、屈辱を覚える行為はなかろう。そういう恥辱を自ら求める人間は、「高貴」と表現するほかはなかろう。

仏教においては乞食^{こじき}は修行の一部を構成している。

ジミーがかつての友人たちの邸宅^{しやうたく}で求めたのは、お茶とトーストのみであった。決して、奢侈^{しやうぎ}を求める行為ではなく、ただ露命^{ろめい}をつなぐために必要なものを求めたにすぎない。

ジミーは豊かな微笑にも恵まれていた。彼の顔からは一度として微笑が絶えることはなかった。それは前半生においても、苦難に満ちた後半生においても変わることはなかった。

ジミーの人世が愛に貫かれていることは、死に際のエピソードが雄弁に物語っている。それは死を看取った女性である。彼女はプリシラに相当する存在であろう。彼女の愛はまさにアガペーそのものといってよかろう。貧困にあえぐ老人の最期を看取るといふ行為はなんらの見返りを求めない、真実の愛から出た行為である。これこそが、神の愛の反映としての愛でなくて何であろう。

逆にいえば、ジミーはそういう愛を受けるのにふさわしい人間であった。ムーディ老人の変貌が、再婚した女性、その結果としての、プリシラに象徴されるように、晩年にジミー・ローズが到達した境地はこの女性によって示唆されている。この女性と語り手は、主人公に対して真実の愛を失わなかった代表であろう。

死期に臨む病気の間、彼女は自らの手でジェリーやブラマンシェを屋根裏部屋の彼に運んだし、寝返りを打つのを助けたりもした。ジミーよ、あなたは美しい女性の手で介抱される資格があったし、老いた目を女性の美しい指で閉じてもらうに値する人であった。なぜなら、あなたは、富めるときも、貧しいときも、生涯を通して女性の擁護者であり、帰依者であったのだ。

During his last sickness, with her own hands she carried him jellies and blanc-mange; made tea for him in his attic, and turned the poor old gentleman in his bed. And well hadst thou deserved it, Jimmy, at that fair creature's hands; well merited to have thy old eyes closed by woman's fairy fingers, who through life, in

riches and in poverty, was still woman's sworn champion and devotee. (344)

貧困の極にある老人の最期を看取るのは、何らの見返りを求めない、究極の愛の行為である。そして、ジミーは引用にあるように、その愛を受けるのにふさわしい人であったのだ。

さらにはジミーには、かすかであるが、イエス・キリストのイメージが写し込まれているように思われる。

ジミー・ローズの前半生の途方もない浪費と気前のよさ、パーティでの高価なワインの惜しげなく饗応。これは実質的にカーニヴァルの空間の再現だと解釈される。

イエス・キリストの愛のメッセージも祝祭に関係しているように思われる。実際、イエスが登場する場面は、祝祭であることがおおい。その典型は、最後の晩餐であり、これはユダヤの過ぎ越しの祝祭日なのである。またイエスは来るべき天の王国を結婚の祝宴に喩えてもいる。カーニヴァルと灰色の労働の日々は、天の王国と現実世界の対比でもある。イエスの説く愛は、高められた精神化された祝祭の愛ではなかろうか。その精神は、後半生のジミーに生き方に引き継がれている。

さらには頭韻を踏んだ「ジェントル・ジーザス」(gentle Jesus)は広く人口に膾炙した語句であり、gentleはそれのみでキリストを暗示する単語である。それがジミーに対して二度、かれを介抱した女性に一度使用されている。これは決して偶然ではないはずである。

さらには、メルヴィルという作家においては、薔薇はイエス・キリストのシンボルであることは既に述べておいた。

本論の立場は、この作品が聖書とホーソーンの延長線上にある、それらの焼き直しだということである。しかし、この作品には、これらの前テキストから決定的に決別する要素も存在する。聖書の発するメッセージは、富を是とし貧を非とする、一般に行き渡った常識を覆すものであった。その思想を引き継ぎながら、メルヴィルはそれを新たな方向に展開している。

それは貧者の「誇り」である。それは金満家の傲慢とは根本的に異なったものである。つまり確かに、ジミーは施し物は受け取ったが、それは決して一方的ではなかった。かれはその対価を十分に支払っていた。語り手はそれを次のように語っている。

貧窮に苦しむあなたは貧者にあたえる一文の金もなかった、しかし富者にあたえる施しは持っていた。街角で寒さに震える乞食がパンを求める気持ちといえども、虚栄心がお世辞を求める気持ちよりも強いとはかぎらない。貧困によって飢える貧乏人もいれば、豊満の中で飢える金持ちもいるのである。

Though in thy own need thou hadst no pence to give the poor, thou, Jimmy, still hadst alms to give the rich. For not the beggar chattering at the corner pines more after bread than the vain heart after compliment. The rich in their craving glut, as the poor in their craving want, we have with us always. (344)

お茶をご馳走になる際には、ジミーは常に町のニュースを用意していた。図書館に通ってヨーロッパの事情や、アメリカや外国の文学によく通じていて、教養のない金持ちたちに教えたりもしていた。

そういうジミーの矜持が典型的に表現されているのが、死に際の印象的なエピソードであろう。介護の女性もたらした見舞いのための本を投げつける際に、かれは「私を貧者と思っているのか。貧者の膏藥でもって、紳士の心の痛みを癒そうというのか」(“Does she take me for a pauper? Thinks she to salve a gentleman’s heart with Poor Man’s Plaster ?”) (344)という怒りの言葉を投げつける。

彼は物質の領域においては貧者である。しかし、精神の領域においては貧者であることを拒否している。注意すべきは「紳士」という言葉である。これは現代英語における紳士という意味ではなく、その昔の階級に関係した言葉である。かれは所有する金の多寡による階級を否定しているのである。新しい価値観によって、見下げられるのを拒否している。そういう意味では、かれの心には、かつての時代の優雅な貴族趣味が生き続けている。

孔雀はプライドの象徴であるが、この物語では、プラスとマイナスの両面を兼ねているように思われる。日本語でいえば「高慢」と「誇り」である。得意の絶頂の時代の高慢は確かに、人々によって踏みつけにされてしまった。しかし、かれの心はかつての優雅な時代の寵児の「誇り」を失なったわけではないのだ。

であるから、ジミーの家の孔雀は微妙なタッチで描かれていることに注意を払わねばならない。鳥たちは雨漏りによって、かつての豪華さは失ってはいるが同時に「しかし、これらの鳥たちは辛抱強く、快く、場合によっては澁刺として辛い運命に耐えて、その姿には本物の優雅さが残っていた」(“Yet so patiently and so pleasantly, nay, here and there so ruddily did they seem to bide their bitter doom, so much of real elegance still lingered in their shapes...”) (338)と述べられている。

アメリカンドリームはアメリカ社会に深く根ざしたエートスであり、国是とも称すべきものである。アメリカという国家は、アメリカンドリームを信じる人々に支えられていると言っても過言ではなかろう。豊かさこそが、アメリカ人の理想である。またアメリカ社会は、建前では平等な社会であり、階級は存在しないという前提に立っ

ている。つまり、成功するか没落するかは、社会の責任ではなく個人の責任なのである。

それゆえに、勝者つまりアメリカンドリームの実現者には、惜しめない賞賛があたえられる。それに対して、敗者は一顧だにされない。階級制度のあるヨーロッパにおいては、貧困は社会のせいにすることが可能である。しかし、アメリカにおいては貧困は、すべて個人の責任なのである。アメリカの貧者は何重もの苦しみを味わわなければならない。そういう苛酷な運命を背負っているのである。

しかし逆説的に、踏みつけにされるからこそ、アメリカの貧民は誇りたかひのだ。それがメルヴィルの結論であろう。これはほかの作品にも表明されている、メルヴィルの貧困の哲学である。

「ジミー・ローズ」からの引用は The Northwestern-Newberry Edition により、引用の後に頁数を記す。Herman Melville, *The Piazza Tales and Other Prose Tales: 1839-1860* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1987).

注

1. 文学における薔薇の象徴性については、下記の川崎寿彦の著作を参照にした。その第一章の「薔薇をして語らしめよ」は「エミリーに薔薇を」における薔薇の象徴性に関する論文であり、同時に薔薇の象徴性そのものについてかなりのページを割いて論じている。『薔薇をして語らしめよ—空間表象の文学—』(名古屋大学出版会、1991)。
2. Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader’s Guide to the Short Stories of Herman Melville* (Boston: G K Hall, 1986), p.257
3. Herman Melville, *Poems, The Works of Melville: Standard Edition XVI* (London: Constable and Company Ltd, 1924), p.340.
4. Richard V. Chase, *Herman Melville: A Critical Study* (New York: Macmillan, 1949). Richard Harter Fogle, *Melville’s Shorter Tales* (Norman: University of Oklahoma Press, 1960). James W. Gargano, “Melville’s ‘Jimmy Rose,’” *Western Humanities Review*, 16 (1962), pp.276-80.
5. Gargano, p.278.
6. Gargano, p.277.
7. Ralph M. Tutt, “‘Jimmy Rose’—Melville’s Displaced Noble,” *Emerson Society Quarterly*, 33 (1963), pp.28-32.
8. Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance and Fanshawe, Centenary Edition III* (Columbus: Ohio State

University Press, 1964), p.182.

9. Hawthorne, p.184.

10. Hawthorne, pp.185,186.

11. Hawthorne, p.47.

12. Hawthorne, p.115.